



Takao Saito \_1936年生まれ、大阪府育ち。1955年、『空気男爵』でデビュー。1958年、仲間と「劇画工房」を結成し、大人も楽しめる「劇画」を定着させる。1960年、漫画制作に分業制を取り入れた「さいとう・プロダクション」を設立。1968年に連載開始した『ゴルゴ13』は一度も休載することなく続いている。自伝に『俺の後ろに立つな』（新潮社）がある。2003年紫綬褒章、2010年旭日小綬章受章。

プロ意識を礎に独自の価値観を築き、  
揺るぎない成果を出し続ける

さいとう・たかを氏

劇画家

## CAREER CRUISING

キャリア・クルージング

Interview = 泉 彩子、大久保幸夫  
Text = 泉 彩子 (58~60P)  
大久保幸夫 (61P)  
Photo = 刑部友康

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探するため、各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

劇画『ゴルゴ13』の生みの親。1968年の連載開始以来40年以上も支持される理由は、アクションの面白さや世界情勢を反映した飽きさせないストーリーに加え、主人公のスナイパー・ゴルゴ13の人物像にある。ゴルゴ13はプロとして冷徹に人を殺す一方で、無用な殺生はしない。どこか人間性を感じさせるのは、さいとう氏がゴルゴ13を単純な「悪」としては描いていないからだ。

「人殺しはもちろんいけません。ただ、善悪のとらえ方には社会体制も影響しますよね。だから、私自身、一般的な解釈には素直にうなずけないんです。社会通念に従えず苦勞することは、子ども時代からよくありました」

### 手塚治虫氏の酷評を受けても 漫画への意欲を燃やし続けた

8歳で敗戦を迎え、戦前の社会通念の崩壊のなかで育った。社会通念を信じないのは「時代」の影響も否めないが、生まれつきの性分でもある。

「蛙のお尻にストローを差してお腹を膨らませると残酷だと怒る大人が、目刺しを平気で食べる。その矛盾がどうしても理解できませんでした。一事が万事で、学校の授業も疑問だらけ。学業はからっきしだめでした」

得意なのはケンカと絵。物心ついたころから映画好きでもあり、無声映画にはじまりあらゆる作品を観た。

「漫画を描くようになったのは、中学時代に手塚治虫先生らの作品に出会ってからです。それまでの戯画的な漫画にはなかったストーリー性に驚き、『これは面白い。紙で映画が作れるな』と俄然興味が湧いたんです」

その手塚氏に中学時代に投稿した漫画を「子どもらしくない」と酷評されたこともある。

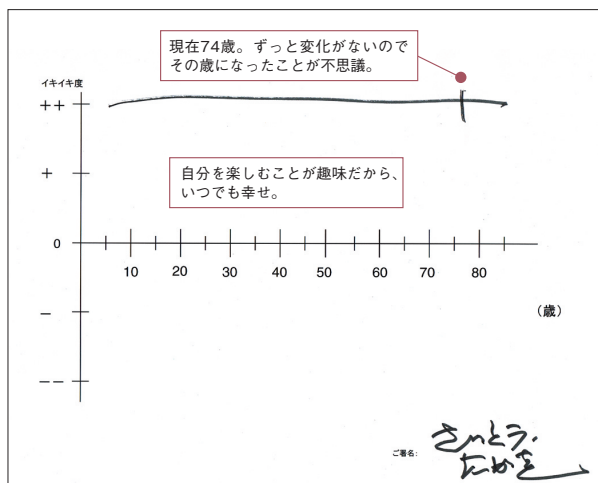
「ところが、私は三男で兄たちにもまれて育ったせいか、めげることを知りませんでね。確かに子どもらしくはいかかもしれないけど、ストーリーには自信があった。ドラマがあり、大人も楽しめる漫画が定着すれば、『漫画は子どものもの』という通念は過去のものになるはず。そう考えて漫画への意欲を燃やしていました」

### 最初から「仕事」にするつもりで この世界に入った

家庭の経済事情により、中学卒業後は姉とともに家業の理髪店を継いだ。働きながら描いた『空気男爵』で

## さいとう・たかを氏 キャリアヒストリー

1936年	0歳	和歌山県に生まれ、大阪府堺市で育つ。「ガキ大将」で学校の試験では答案用紙を一度もまともに提出せず。幼いころから絵は得意だった
1950年	14歳	家業の理髪店を手伝いながら、漫画家を志す。中学卒業後、母親の意向で理容学校へ。枕絵（春画）を描くアルバイトで稼いでは映画館に通い、貸し本屋で漫画を借りて読みふける
1952年	16歳	家業を継ぎ、姉と大阪・今里新地に理髪店を出店
		 <p>もともと手先が器用で客の評判も高く、店は繁盛した。</p>
1955年	19歳	大阪の出版社より『空気男爵』で漫画家デビュー
1958年	21歳	上京。仲間と漫画談義に明け暮れ、大人向けの漫画の名称を辰巳ヨシヒロ氏提唱の「劇画」に統一。7人の仲間と「劇画工房」を結成する
1960年	24歳	「劇画工房」解散。「さいとう・プロダクション」設立。『台風五郎』を皮切りに多数の劇画を制作
1966年	30歳	網膜剥離で失明の危機に立たされ、1カ月入院
1968年	32歳	『ビッグコミック』にて『ゴルゴ13』連載開始
2008年	72歳	『ゴルゴ13』連載40周年を迎える
2010年	74歳	『ゴルゴ13』『鬼平犯科帳』『仕掛人藤枝梅安』を連載中



直筆の人生グラフ。戦争も大病も経験した。高いレベルの一定した幸福度は「命があるのは当たり前じゃない。生きているだけで幸せ」という考えの表れだ。



19歳のときにデビューにこぎつけた。漫画嫌いの母親を説き伏せ、2年間かけて完成させた作品だった。

21歳で上京。その後、さいとう氏は当時の漫画界にはなかった2つの発想を形にしていっていった。1つ目はドラマとしての完成度が高く、大人も読める「劇画」というジャンルの確立。2つ目は24歳でプロダクションを設立し、漫画制作に分業制度を導入したことだ。

「単純に考えてもわかるのですが、ドラマを考える才能と絵を描く才能は別のもの。当時の漫画家はマルチであることが求められていましたが、それができるのは一握りの天才だけしかいない。映画制作のように分業化して才能を持ち寄せれば、より完成度が高いものができるかと踏んだんです。でも、周囲からは異端者扱いでした」

現在の「さいとう・プロダクション」では脚本を外注し、構成担当がコマ割など演出を決定。作画も人物担当と背景担当で分担している。プロダクション設立以来、50年あまり。ヒット作を次々と生み出し、連載を数本同時に描き続けることができているのが、分業制のためのものであることは確かだ。とはいえ、現在の組織はさいとう氏が理想としていた形態とは異なる。

「私の立場は映画という監督ですが、当初は核分裂を起こして第二、第三の監督を誕生させたかったんです。ところが、核として作品を生み出せる人間はみんな独立してしまいました。私自身は自分が漫画家として万能ではないと悩んで共同作業の必要性を感じ、みんなもそうだと信じ込んでいたのですが、違った。この世界に入ろうという人はみんな『我こそは天才』と思っているんです」

漫画を描くことへの意識も、デビュー当時から周囲とは隔たりを感じるが多かった。

「私は最初からこれを仕事にしようとする世界に入ってきました。だから、『好きなものだけを描いていればいい』という考えはまったく理解できませんでしたね。お金を払って読んでもらうからには、それ相応にみんなを納得させるものを作るのが当然。『読むんじゃなかった』なんて思わせたら、泥棒と同じじゃないですか」

## 困難を我慢なんてできない

### 楽しまなきゃ

『ゴルゴ13』は2010年3月で500話を達成したが、当初は短期連載のつもりだった。



「連載が始まるときには、ストーリーをパターン分けして何話書けるかを考えますが、ゴルゴの場合は10話ほどしか思い浮かばなかったんです。いまだにそのときに考えたパターンを繰り返しているだけで、最終話も開始時に決まっていました。ただし、最終話がいつになるのかは、読んでくださる方次第。私にもわかりません」

長年連載を続けてきたことに対しては「毎日畑を耕すようなもの。我々の世界は昇進もありませんから、変化がないんです」と笑う。だが、休載も珍しくない漫画界で、一度も休まず、読者に支持され続けるというのは並大抵のことではない。分業制に助けられたとはいえ、これまでには大病で入院したり、スタッフが一気に辞めるなど数え切れない困難もあった。それでも描き続けたのがプロ意識のなせる技であることは言うまでもないだろう。驚かされるのは苦境を脱するまでの姿勢だ。

「網膜剥離で1カ月入院したときは、視覚に代わって想像力が高まる面白さを堪能しました。医者に我慢強いと言われましたが、我慢なんてできません。楽しまなきゃ」

その前向きな思考はどこから生まれるのだろうか。取材の最後に、さいとう氏はこんな話をしてくれた。

「幼いころから、私は人間の脳みそが不思議でした。地球で誕生したものにしてはほかの動物にくらべて発達し過ぎていて、宇宙からの借り物としか思えないんです。脳みそですら借り物なら、自分の思い通りになるものなんて何もない。物事がうまくいかないことを思い煩う暇があったら、自分が心地よくなることにエネルギーを集中させないと脳みそに失礼じゃないですか」

まだ74歳。今後も一作一作に「弾」をこめ、その「百発百中」の質の高さで読者を唸らせてくれるに違いない。

■ さいとう・たかを氏のキャリアをこう見る

## 42年間休載なし ゴルゴ13並みのプロフェッショナルリズム

大久保幸夫

ワークス研究所 所長

何といっても42年間にわたって『ゴルゴ13』の連載を続け、一度も原稿を落としたことがないというのが驚異である。質の高い仕事を長期にわたって持続するということがプロの証明。そのわけが知りたい、ということで取材を申し込んだ。

「はじめに啖呵を切ってしまったから、休むに休めなくなっただけ。連載しているのだから続けるのは当たり前のこと」とさいとう氏は笑う。

当時の売れっ子の漫画家は、受けられるだけ執筆依頼を受けて、穴をあけるのが当たり前。むしろそれが売れっ子の証しという空気だったという。さいとう氏はそれをおかしいと思い、異論を唱えた。その言葉に自分が縛られて、意地でも休めなくなったというが、実際は仕事に対する厳しさと真摯な姿勢があったからに違いない。

42年連載の背景には、さいとう氏がはじめた分業制の効果が大きかった。漫画家はほかの人は皆ライバルと考え、自分一人で仕上げることにこだわる傾向があるというが、さいとう氏は、はじめからビジネスとして漫画（劇画）をとらえていたので、分業に抵抗がなかったという。体制のイノベーションがあってこそその継続性だったのである。

しかも大病をするたびに、構成スキルが上がったという。頭のなかで構成できるページ数が、病気をするたびに増えて、電話で構成やせりふ

割りを指示できる量がどんどん増えていったのだ。危機に直面して能力を伸ばすというのもプロらしい特徴である。

私も『ゴルゴ13』の愛読者で、リード社の単行本は第1巻からすべて読破したが、原則読みきりの物語で、期待はずれの展開だったものがない。その質の安定感があるからこそ、読者の支持を得ているというのも、続いている理由の1つであろう。

訪問前に写真でさいとう氏のお顔を見たときには、ゴルゴ並みの気難しい方かと思ったが、意外にも親しみやすい話し上手な方だった。しかし、そのプロ意識はゴルゴそっくり。やはり、作者とキャラクターはどこか通じるところがあるのだろうか。

### ◆ さいとう氏の話聞いて 思い出した名言

「才能とは、長い努力の賜物である」  
(フランスの小説家 G.フローベル)

「念願は人格を決定す 継続は力なり」  
(宗教家 住岡夜晃)

「才能は、継続できる情熱である」  
(将棋棋士・名人 羽生善治)